～古希まであと１年～



2021 年最初のえん通信をお届けします。無事に新しい年を迎えられたでしょうか。みんなのコンサート、認知症カフェやだれでも食堂などでお目にかかっていた皆さん、しばらくお目にかかれていませんが、いかがお過ごしですか。コロナが収束したらまた会いましょう。

年明け早々に２度目の緊急事態宣言が出されました。とはいっても、介護の現場はずっと「緊急事態」ですから特に変わらない日々です。今日までは利用者さん職員とも感染者はゼロですが、明日はどうでしょう。誰かが発熱したと聞くたびにドキドキの毎日です。

えんの職員は市内・近隣自治体在住者が多く、自転車やバイクで通う人がほとんどです。１回目の宣言が出された時に感染リスクの高い電車通勤から自動車通勤に切り替えてもらった人もいて、現在２名だけが公共交通機関利用、「地域密着」はこういうときにもありがたいですね。

さて、わたくし１月７日に 69 才を迎えました。おかげさまで元気に働けていますが、老いを感じることが増えてきました。高齢者や障がいがある人々とかかわる仕事ですから、良いこともあります。利用者さんと年齢が近い分、共感できることが増えます。半世紀以上前の昔話も共通の経験として聞くことができます。

小堀鷗一郎先生のエッセイに、先生の回診を心待ちにしていた女性高齢患者のエピソードがあります。週 1 回を月 1 回の勤務に変えると告げた時、「それなら自分のベッドには来ないでほしい。週１回でもこんなにつらい思いをして先生が来るのを待っているのに、このつらさが１か月も続くのではやりきれない」と嘆かれたそうです。「人と人の間の「通常の会話」への渇望を序実に示している」と先生は書かれていますが、超高齢期は介護施設や医療機関だけでなく一人暮らしでも、人々との会話や心の通い合いが失われます。認知症をカミングアウトされた認知症専門医長谷川和夫先生の日々を追ったドキュメンタリーで、かつてご自分が推奨したデイサービスに、「どうしても行かない」と言い張るシーンがありました。ボール投げを「させられる」つまらなそうなお顔が印象的でしたが、ここに足りなかったのも「通常の会話」や、心に触れる「何か」のように思いました。

毎日仕事に出ている私でも、コロナ禍の今は叶わない、親しい友人と交わす読んだ本の話や他愛のないおしゃべりがたまらなく恋しい。えんでその役割を担っているのはボランティアさんですが、今は皆さんお休み。利用者さんの寂しさはどれほどでしょうか。わたしもフリーになったら「通常の会話」ボランティアになろうかな。

（代表理事／小島美里）